

家族介護者の主観的介護負担感と対処方略の特徴

－ 男性介護者と女性介護者との比較 －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
小牟禮 尚子

本研究の目的は、家族介護者の主観的介護負担感に、介護に関わる様々な要因がどのような影響を与えているのか、また、介護者は介護負担感に対してどのような対処行動をとっているのかについて、男女の違いに着目しながら比較検討することである。

まずは、86名（男性46名、女性40名）の家族介護者を対象とした介護負担感について、介護家族負担感尺度を用いて調査する。

結果、「要介護高齢者以外の家族同居の有無」と「血縁関係の介護協力者の有無」の要因に男女の違いが見られた。男性介護者は介護負担感に2つの要因の影響をうけるが、女性介護者は要因の影響を受けないということが認められた。男性介護者は介護年数と主観的介護負担感に相関関係が認められ、介護期間が長いほど介護負担感が高くなるという傾向がみられた。調査1で明らかになったことは、男性介護者と女性介護者では介護負担感に影響を与える要因に違いがあるということであった。

次に、質問紙調査の対象者の中から17名（男性8名、女性9名）を対象とした介護負担感に対する対処方略について、インタビュー調査を実施した。介護者は介護負担感に対する対処方略としてどのようなものが用いられ、どのようなものが用いられないか、また、対処方略を選択する理由は何かについて、男女の違いに着目して比較検討を行った。

結果、男性介護者と女性介護者では介護負担感に対する対処方略が異なるという事が示された。男性介護者は支援迫及型の対処方略を、女性介護者は回避型の気分転換の対処方略を取る傾向を示した。また、男女の大きな違いは、介護役割の意識の違いによる介護対象者との距離の取り方と情緒的支援を求める対象であった。

本研究で明らかになった事は、男性介護者と女性介護者では介護負担感に影響を与える要因が違い、介護負担感に対する対処方略を取る傾向が違うという事であった。

男性と女性では介護に対する考え方や感じ方、対処の方法が違うため、男性と女性の特徴を活かした支援を考えていくことが重要であると思われる。これらのような、男性と女性の特徴が明らかになったことは、今後の支援の有効な手掛かりになると思われる。

キーワード 家族介護者 主観的介護負担感 対処方略